

平成17年度事業実績に関する外部評価

<総括的意見>

- 開館10周年を迎えた平成17年度は、運営コンセプト「信頼される美術館」をめざし、質の高い事業、サービス、運営を心がけ、過去最高の入場者数を達成した。定量的な面だけでなく、定性的にも優れた展覧会とその関連事業、教育普及事業を実施したことを最も高く評価する。
- 開館10周年記念特別企画展「写真はものの見方をどのように変えてきたか」4部展など、東京都写真美術館ならではの企画展を実施する上で、館のコレクションと研究の蓄積を活かしつつ、教育普及活動やサービス戦略、広報展開も連携し、協力して、効果的に展開している。
- 維持会員の拡充はもとより、10周年特別協賛や協力を募り、館の経営努力によって10周年事業を実現した点も重視したい。館が主体的に始めた評価制度も有効に活用され、毎年それぞれの項目で改善、向上が認められ、館の運営により形で反映されている。さらに、年報やホームページ、積極的な広報活動によって情報の公開と発信を進め、より開かれた美術館を実現している。
- 予算にゆとりがなくても、美術館としてできることがあるという事例として、広くアウトリーチしていくことも今後の課題として欲しい。
- 外部評価とは、畢竟内部評価である。自己の職務を客観的に記述し、その上にとって自己改革していくことではないか。改革のためには、現状に甘んずることなく、常に未来像を描く努力が、これからも求められる。

<事業区分ごとの意見>

(1) 収集・保存

- 作品の収集保存は美術館活動のひとつの大きな柱である。美術館にとって厳しい社会状況のなか、維持会費等を中心とした独自の会計である写真・映像文化振興事業特別会計により、作品・資料の購入(205点)を行い、東京都へ寄贈したこと、さらに、国内写真作品・資料208点、海外映像作品1点、合計209点の作品の寄贈を受けたことは重要である。
- 収集保存活動についても、情報公開を進め、その意義を訴え、都や利用者からの理解を深める努力が必要であろう。収集保存に関し、保存科学的研究員と作品管理担当職員や貸出担当職員との協力、連携体制が強化されている点も評価できる。

(2) 展覧会等企画

- 開館 10 周年記念特別企画展「写真はものの見方をどのように変えてきたか」は、第一部から第四部までの連続企画で、館のコレクションを効果的に活用し、写真の誕生から現在までの歴史を、東京都写真美術館の視点で総括した非常に意義ある展覧会となった。写真・映像文化の普及とその未来への継承、そしてその研究拠点として貢献する美術館の役割にかなった展覧会として大きな成果を残したと評価する。
- 集客性、話題性のある展覧会をバランスよく組み合わせて効果的に実施し、定量目標 38 万人を超え、過去最高の入館者数 443,107 人を記録したことも特筆に価する。同時に、混雑時の安全対策と、鑑賞体験の質と利用者満足度の向上が引き続き課題となる。
- 話題性がなくても優れた写真を伝える展覧会企画や特に若い世代の創造性を刺激する実験的な企画も、ある意味では批判を恐れず実施すべきである。

(3) 普及事業

- 内容、実施数、参加校ともに拡充しているスクール・プログラム（42 事業 36 校・54 回実施）に加え、実技体験プログラムや子供・親子で参加できるワークショップ（23 事業 47 コース・延参加者数 810 人）、展覧会と連携したカフェ+ギャラリートーク（9 展覧会）といった多彩な教育普及事業を展開し、写真・映像文化、その技法や歴史について学び、鑑賞を深める機会を提供した。スタッフとボランティアの人数に限られた中で、確実に教育普及事業の成果をあげている。美術館の潜在顧客開拓という意味からも、重要な取り組みの一つとして、今後も実績を積み重ねていって欲しい。
- 図書館については、OPAC を導入し、館外からもインターネットで蔵書検索できるようになり、利用者サービスが向上した。

(4) 広報・宣伝

- 近隣文化施設との連携、マスコミとの共催などにより、効果的な広報・宣伝活動を行っている。特に、開館 10 周年記念特別企画展「写真はものの見方をどのように変えてきたか」では重点的に記者発表やプレスギャラリーツアーを行い、プレスリリースにも工夫を凝らし、多くの媒体で高く評価され、広く紹介される結果を出した。
- 館長主催の記者懇談会も定着し、館の実績や運営方針、事業計画などを報告するとともに、ホームページをさらに充実させ、館から情報を公開・発信して、開かれた美術館をめざす点が高く評価できる。

(5) 調査研究

- 国内で唯一の写真・映像の専門美術館としての重要な役割を果たし、ミッションにもかなった調査研究活動が行われた。10周年記念特別企画展「写真はものの見方をどのように変えてきたか」では、4冊の図録を新潮社から一般書籍として刊行し、収蔵作品調査や写真研究の成果をまとめ、発表し、写真文化の研究と普及に大きく貢献した。
- 日常業務や数多くの展覧会準備に忙殺される中、調査研究の成果を質の高い展覧会と書籍という形に結実させた学芸員の多大な努力を高く評価すべきである。
- 保存科学の研究においても、大学との共同研究を実施し、学会に発表するなど貢献している。

(6) サービス戦略

- 受付・看視、警備・設備、清掃等の委託スタッフと館職員との連携、情報の共有が図られ、よりよいサービスの提供と運営のために、各部署がとても努力して協力している。
- 年ごとに着実に改善が見られ、来館者の気持ちを考えて活動している印象を受ける。継続的に努力を続けて、モデル・ケースを確立して欲しい。

(7) 経営改善

- 継続的に真摯な取り組みをしてきたことを高く評価したい。恒常的に事業の詳細を反省しつつ、改善すべきことを速やかに取り組む姿勢はこれまでずっと継続してきている。
- 予算削減の中、効果的に自主事業を行い、館の活動を充実させるために、維持会員数(142→173社)と友の会員数(1,441→1,700人)を増やし、10周年特別協賛としての実績(10社8,300千円)を上げた自助努力は高く評価されるべきである。
- 民間から調達する資金拡充に伴い、維持会員や協賛企業に対する特典を充実させ、情報公開とアカウントビリティーを向上させた点でも大きく前進した。年報もデータや図、ビジュアルを用いて、さらにわかりやすく情報公開している点も優れている。
- 館の活動を充実させ、定量・定性目標を達成し、実績と評価を上げる一方で、職員、スタッフに求められる仕事の質と量は増大していることが考えられる。人手不足の解消、労働環境の改善を図る必要があるか、十分に検討されるべきである。それが、よりよい事業の実施、サービスの提供につながるのではないか。